

「こころ」の語り手

——語り手「私」をめぐる

松本 修

* 「こころ」の語り手

小森陽一が「こころ」の語り手について、次のような指摘をし、「こころ」論の偏向を衝いたのはもう十年以上前のことになった。

高校の国語教科書や大学の一般教養向け教科書に、最も象徴的に現れているように、「心」は、「下」先生と遺書」のみを他から切り離し、それだけを中心化し、〈作者〉漱石の思想と倫理を解釈する対象として、〈作品〉化されてきたのである。

小森は、「倫理」「精神」「死」というような父性的価値にひれ伏すような読みをそうした把握がもたらしたというようなことを述べているが、事情はおそらく逆で、そのような読みが遺書の書き手先生の言葉を特権的なものとするような把握をもたらしただけであらう。このテキスト全体の語り手が、遺書の書き手を「先生」と呼ぶ「私」であること自体は、小森の指摘以前にも読者にとっては自明の前提であったはずである。

いずれにせよ、小森の指摘によって、改めてテキスト全体の語り手「私」の位置から、「こころ」という作品が論じられるようにな

ったということは認められてよい。遺書の内容も、「私」の手記の中に引用されているものとして、把握されなければならない。もう一度小森の指摘を振り返れば、「こころ」の読者は、次のような位置に立つものとしての自分を再確認することになったのである。

「こころ」というテキストは決して一義的な意味を凝固させようとする者を読者として選んではない。遺書に凝固した文字としての「先生」の言葉を、自らの「こころ」の中に「血」として再生させ流そうとする「私」と同じように、「心」の読者は「先生」の言葉、そしてまたそれを引用し対話的にかかわろうとする「私」の言葉を、自らの心臓を流れる血液として、新たに生かしようものではない。

このようにテキスト全体の語り手としての「私」と遺書の中の先生の言葉との関係そのものを視野に入れてこのテキストを読むとき、それでは、「明治の精神」以外の、あるいは漱石の思想以外の、どのような点がクローズアップされることになるのだろうか。

* 関係性の把握

従来の作家論的・倫理的な読みに対する異議申し立ては、語り手の「私」を単なる機能的存在とせず、人格性を持った存在として見ることに、「私」による語りの現在と、物語られる先生と関わる「私」の時間との懸隔を意識すること、よって行われる。しかし、このような姿勢を共有しながらも、読みはやはり分岐する。

石原千秋は、「私」と「先生」との間に葛藤を見て、「私」には父性としての「先生」に対する抹殺願望があるとしている。先生の発する謎が、「私」にとつてダブルバインドをもたらず内的葛藤として機能し、先生を理解することがそのような葛藤を指示した先生の禁忌を破ることを意味するという把握である。そしてこの文脈で「私」は、明かしてはならぬ真相を手記として明かすことによつて、父殺しを果たすと同時に、暗喩されていた奥さん（静）の処女性に対する侵犯の禁止を破ることを示唆しているという論の展開になっている。

一方小森は、奥さんの純潔に対する「私」の行為の可能性を、「私」が奥さんとの間に子をなしている段階を語りの現在と想定するということ形ですらに一步踏み込んで示しながら、「私」と先生との関係については、ある意味でより倫理的な意味づけを行っている。「私」が危篤の父の父を見捨て、先生の遺書を手東京へ向かうという行為のうちに、既存の血の論理を否定し、先生の呼びかけに応じて、精神と肉体を一如とする新たな血の論理と倫理に積極的に生きようとしているのだ、とするのである。

このような相違がなぜ導かれてしまうのだろうか。

*語り手に関する情報の不足

石原・小森に発する近年の「こころ」論の展開は、テキスト全体の語り手である「私」への着目と再評価によつてもたらされているわけだが、その後の個々の読みが、物議をかもしながらももう一つ一般に受け入れられず、決定的な新しさを持ち得ていないのは、皮肉なことに、「私」の存在が無視されてきたこととまさに同じ理由によつて見ることが出来る。

それは、「私」に関する情報の不足である。もちろん、実父との訣別といった、行動する作中人物としての性格は認められる。しかし、生な形で特に語りの現在（手記執筆時点）の「私」の人格性を補強してくれる情報はあまりに不足している。だからこそ三好行雄は、次のように断じていた。

語り手としての私は作者と一体不可分な代弁者であり、傀儡かいらいではない。こうした小説の構造から見て、遺書が青年の心象を通過してからのいわば成熟の時間が、話者の現在にはたらきかける余地はない。⁵⁾

語り手が徹底的に物語内容に関与しなかったり、あるいは人格的痕跡を見せないにもかかわらず物語内容に干渉したりすれば、かえって語り手の役割が顕在化するということもある。「こころ」における語り手「私」はいわばちようち中途半端な形で物語内容に関与しているのだとも言える。このような不完全な情報から、語り手像を判然としたものとして引きだそうとすると、たとえば次のような箇所をあげて「奥さん」の「私」への意識を読みとると

というようなことが行われることになる。

「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いて云った。私は「そうですね」と答えた。然し私の心には何の同情も起らなかった。子供を持った事のないその時の私は、子供をただ蒼蠅蒼蠅いもののように考えていた。

「一人貰って遣ろうか」と先生が云った。

「貰もらッ子こじゃ、ねえあなた」と奥さんは又私の方を向いた。

小森は、この部分の「私の方を向いて云った」「子供を持ったことのないその時の私は」「ねえあなた」「又私の方を向いた」に傍点を振り、次のように述べる。

しかし問題なのは、単に二人称的呼びかけの両義性、つまり「先生」と「私」とに対する「奥さん」の態度が同じであるだけではない。この対話が「先生」の「奥さん」との「愛」において、排除された身体的領域、禁止と欠如の枠に囲い込まれた欲望（性欲と生欲）をめぐるものであり、その「先生」との一種対立的な対話についての解答というより同意が、「私」に向けられているということなのだ。

小森はこのあとこれ以上の解釈はしないと言いながら、「私」の道と愛は奥さんと共に生きることとして選ばれたはずだと言う。だが、引用箇所にある会話は三者の会話であり、奥さんは先生を見なければ私を見なければならず、先生以外にあいづちでも求めようとするれば、「私」に求めるしかない。「あなた」という呼称も当時の東

京のこの階層にとつてはニュートラルな呼称だと思われる。引用部分には確かに手記執筆時点の「私」に子供のあるらしいことが示されているが、それが「奥さん」と結びついていくという読みは、やはりひとつの解釈の可能性にすぎない。語り手としての「私」への着目が新たな解釈の拠り所とされたのでは、語りの分析は再び解釈の方法に還ってしまうことになる。

要するに十分な情報がなければ語り手像は決定されるものではなく、語り手像に依拠しつつ解釈を語ることは、不可能だとしなければならぬ。「こころ」には、語り手に関わる情報が不足しており、ここから出発する議論は、常にも増して相対的なものとならざるを得ない。

* ナラトロジーを超えて？

ナラトロジーの役割は限定的なものであること、ナラトロジーの知見が解釈に関わる場合にも、そのテキストの相貌に依拠しての限界があることをあらためて確認しておこう。

ところで、こうした小森の戦略をナラトロジーを超えるものとして高く評価しているのが、榊敦子である。

小森の分析がテキストの稠密な読みに基づいており、テキストと歴史的人物としての作者やその周辺と結びつける、憶測や印象に基づいたロマン主義的批評と一線を画すことは言うまでもない。そして、構造主義的物語分析（ナラトロジー）の雄であるジュエール・ジュネットが「物語のディスクール」で活用した方法を意識していることも確かである。しかし、小森の実践している

分析は、彼の標榜する方法論を含みつつもそれを超えているのではないか、というのが私の考えである。それは、彼が物語を静止した構造ではなく行為としてとらえ、テキスト内部の仮構の作者（小森自身は「内包された作者」と呼んでいる）とテキスト内部の仮構の読者（同じく「内包された読者」とのコミュニケーションのダイナミズムにこだわっているからである）。

榊のこの評価が、構造主義Ⅱ静態的、言語行為論Ⅱ動態的とする短絡によっていることは問題である。デリダーサル論争をどう位置づけるのか聞いてみたい気もする。しかし、それはとりあえず措くとしても、「方法論上、多数の語り手が出現したり、語り手の立場に変動が生じたり、あるいは語り手と仮構の作者（小森陽一の訳語では「内包された作者」）の關係が錯綜していたりするほうが、語りのパフォーマンス性が顕在化する」と自ら言う榊が、小森の分析を無条件に賞賛するのは戦略的すぎはしないだろうか。語り手に関する情報の量と質によってナラトロジーの役割が大きく左右されるのであれば、「こころ」の語り手「私」を鍵にした分析が行われなかったことの正当性もまたそれなりにあったと言すべきであろう。小森・榊の分析を構造主義的ナラトロジーと隔てて「語りの言語行為論」と呼んでみたところで問題は何も変わらない。ナラトロジーは簡単に超えられるものでもないし、超えてどうなるというものでもない。

*新たな教材分析と授業

小森・石原に代表される新たな「こころ」論の動向を反映した形で編集されている教科書に、石原自身が関わっている第一学習社の『現代文Ⅰ』がある。この教科書では、要約を繰り返し読みながら、「先生」の墓参りに始まる「上」の一部分、「下」のKとの房総旅行の部分、そしてお嬢さんをめぐるやりとり以下の部分が採られており、「こころ」の全貌がともかくも見えるようになってくる。このようなテキストを用いれば、授業の中でも語り手「私」の問題をクローズアップさせることができよう。その場合、語り手「私」を考える上で重要な情報となる表現をあらかじめリストアップしておくことが教材研究として重要なことになる。そして、教科書掲載以外の部分からも重要な表現を参考に提示することも考えておくことが必要であろう。その上で、そうした表現を分析することで、どのような考え方が可能性として予想されるか、対立的な読みも含めて予想しておくこと、さらに、そうした語り手像の把握と物語内容に関する解釈がどのように関連しうるか、これも多様なバリエーションを予想しておくことが必要になる。ナラトロジーを受けての教材研究はこのようなものになる。そして授業は、そうした様々な把握、解釈を交流させつつ、それぞれの学習者が自らの読みを成立させ、一方で再検討していく活動を中心とするものとなるであろう。そのような場で、たとえば小森の解釈が生な形で持ち込まれ、新たな権威としてふるまったりするのは、ナラトロジー以前への逆戻りとなる。ナラトロジーは超えられるべきものではなく、読みの交流の方法的基盤として限定的に活用されていくべきものである。

- 1 小森も指摘するように漱石の「こころ」は、作品名が、「心」、「こころ」などで揺れるところがあるが、こころでは、高等学校の教材名として親しい「こころ」を用いる。
- 2 小森陽一 『文体としての物語』一九八八筑摩書房 二九四頁
- 3 小森 前掲 二九九頁
- 4 石原千秋 「こころ」のオイディプス—反転する語り—『成城国文学』一一九八 五・三 玉井敬之・藤井淑禎編『漱石作品論集成第十巻 こころ』一九九一 おうふう 所収
- 5 三好行雄 「こころ」鑑賞—鑑賞日本現代文学5夏目漱石—一九九四 角川書店 引用は前掲『漱石作品論集成』二九七頁より
- 6 夏目漱石 「こころ」上八こころでの引用は新潮文庫より
- 7 小森 前掲 三二六—三二七頁
- 8 榊敦子 『行為としての小説—ナラトロジーを超えて』一九九六 新曜社 八頁
- 9 榊 前掲書 一二頁

(まつもと おさむ 上越教育大学)